

## リアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムの

### 複合としての東アジア秩序——整理と展望

天児 慧

#### 1、東アジア秩序の現状をどう認識するか

① パワー、利益、規範の不均等並存状況としての東アジア

② リアリズム的状況

- ・「中国崛起」→パワー・トランジション (但し「中国崛起」は70%を超える対外貿易依存度、800億ドルを超える直接投資に象徴される経済相互依存を支えられている側面が大きい)
- ・日米同盟強化 VS 中国→パワー・バランス
- ・朝鮮半島の核問題→北朝鮮「弱者の恐喝」
- ・中台関係→中国の「砲艦交渉」(「台独派」封じ込め=現状維持派の増大) + 米国とのバーゲニング

③ リベラリズム的状況

- ・東アジア地域における経済の総合依存の構造化 (貿易、投資、経済利益の共有など)
- ・米中関係におけるステイク・ホルダー論 / 日中経済関係は米中より緊密
- ・中台経済相互依存は台湾経済にとって死活

④ コンストラクティビズム的状況

- ・ASEANの実践とASEAN共同体構想→ASEAN憲章に見る規範論
- ・中国→中華アイデンティティの強調(孔子学院の拡大)

#### 2、東アジア秩序形成の趨勢と課題

① アジアにおけるこれまでの秩序形成をどう理解すべきか

- ・ 自生的秩序形成 = 歴史的に見て重要性を持つ  
19世紀末以前の東アジア秩序：華夷秩序は自生的秩序の上に形式的に被さったもの  
ASEAN型秩序：東南アジアの自生的秩序 + エリートの合意形成)  
東アジア経済統合の進展 (デファクトとしての経済統合)
- ・ 設計によるレジーム形成 = 失敗の歴史  
大東亜共栄圏構想、SEATO、  
但し、米国と自由主義諸国のハブ&スポーク型レジームは重要な機能を持つ

- ・ **構成的秩序形成**＝萌芽状況

ASEAN 憲章 (2007 年)、「アジア共通の家」??

## ② 東アジア共同体論の取り組みと対立

- ・ 経済ファンクショナリズムの深化・拡大
- ・ EAC の範囲をめぐる日中対立
- ・ ASEAN 共同体の先行的発進
- ・ 日中韓対話の始まり

## ③ 「中華秩序論」をめぐる周辺の懸念と不安

＝国民国家体系 (ウエストファリア体制) 型秩序論との相違

- ・ 2 つの特徴 :

(1) **構造としての円錐型、同心円型の権威主義的階層型秩序**＝権威の階層性→「文化」(儒教思想) 体得の度合い (天子→中央官僚群→地方官僚群→官僚予備軍 (読書人、地方名士など) →一般漢人庶民[ここまでが「華」]、その下位周辺に中華文化を享受しない野蛮な人々 (東夷、南蛮、西戎、北狄でいわゆる「夷」) が存在/ポイントは西欧的な国境概念がなく、天子の統治は未広がり的に無限に広がっていく天下としてとらえられる。

(2) **秩序形成における非法制性と主体の重層性**→「修身・齐家・治国・平天下」(各人・家・国 (地方)・世界と重層的なアクター+修養、教化による秩序形成がポイント＝天子の理想的な統治: 霸道と対照的に文化による教化、徳・仁による統治＝王道政治→最大の問題: 儒教的価値観、上下関係を重んじる権威主義的思考を強く持つ。浜下武志の中華秩序のダイナミズム「華夷変態論」、大アジア主義に基づく東亜共同体構想＝日本を盟主とし、日本人を優秀な文化を有する為政者 (=華)、「一視同仁」の儒教的秩序観→日本型「中華秩序論」

- ・ 現在の中国のソフトパワー論: 「平和と発展論」、海外途上国支援、孔子学院の世界展開

## ③ ASEAN・Way の質的転換の挑戦

- ・ ASEAN における全会一致・合意方式の功罪

(1) 功: 相互尊重・内政不干涉→相互信頼の醸成、外圧に対する共同歩調・対応に効果

(2) 罪: 域内における共通問題への共同対処、相互協力、斬新な改革取り組みが困難

- ・ ASEAN における多数決方式の導入

## 3、各国内政の変容と東アジア秩序への連動と今後の展望

### ① 従来のパターン

- ・ 国内問題はその国の中央政府が責任をもって対処→国内秩序維持
- ・ 国際秩序は国家(政府)間における交渉・取り決め・ルール、多国間枠組みによって維持

### ② 現在・未来のパターン

- ・ 国内と国際の相互作用・相互刺激の度合いが深まる＝各国国内問題が容易に国際問題化

する。逆に国際問題が1国内の政治・経済の在り方に強く影響する

(例)1国内の HIV、SARS、環境汚染が一举に国際問題化／グローバル化が生み出した各国の貧富の格差拡大→リージョナル秩序の不安定化

・問題に取り組むアクターとイシューの多様化

### ③人間の安全保障メカニズム構築による地域秩序の形成

・対応の視点：発生問題群への組織的制度的対応を通して維持・形成される地域秩序

(1)問題の予防＝潜在的発生地域に対する情報の的確な把握、具体的予防措置の取り組み  
→日常的管理メカニズムの構築

(2)問題発生後の極小化＝状況の的確な把握、情報の共有、現場における問題処理の速やかな対応、問題の拡大防止への取り組み  
→危機管理メカニズムの構築

・具体的なメカニズム構築案

(3)アジアの主要大学に「社会危機予防管理 SCPM センター」(人間の安全保障センター、非伝統的安全保障センター)を設置する＝その国・地域の潜在的問題群の状況をできるだけ多く、正確に把握し、地域独自の対策シュミレーションを作成する

→SCPM センターは当地の政府関係部門、専門的研究機関、有力な NGO 団体などとのネットワークを構築する。SCPM センターが対象とする問題群は、環境・感染症・自然災害・貧困などの問題である。

→各国 SCPM センターは相互に緊密な連携関係を構築し、「アジア SCPM 事務局」を設置し統合的な活動を展開する

※基本的にはリベラル・ファンクショナル・アプローチだが、これを通して各国の信頼醸成を強め、規範・アジアアイデンティティーの醸成に効果が挙げられる (コンストラクティビズム・アプローチ)